

海外音楽講習会参加者のための英語セミナーについての考察

A Study of the English Seminar for the Participants of the Overseas Music Courses

山村 薫 YAMAMURA Kaoru 中西 千春 NAKANISHI Chiharu

本稿は国立音楽大学で海外音楽講習会に参加する学生を対象とする「外国語（英語）セミナー」（以下、英語セミナー）についての小論である。本研究では、まず、海外で指導をしている3名の日本人音楽家にインタビューをし、クラシック音楽を学ぶ学生が海外でレッスンを受ける際に求められる姿勢を探った。結果、自発的な学習姿勢、そして積極的に講師とコミュニケーションを取ろうとする姿勢が何よりも重要であることが明らかになった。次に、英語セミナーに参加する学生の現状とニーズを調べたところ、海外の講習会参加は全員にとって初めての体験であり、多くの学生が英語でのコミュニケーションは好きであるものの、不安を感じていた。このため、英語セミナーでは講習会での講師との会話を想定して、レッスンでの模擬会話を繰り返し行った。調査と英語セミナーの実施に基づき、今後の英語セミナーの授業や教材について考察した。

キーワード：海外音楽講習会、演奏、英語、自発的、学習姿勢

1. はじめに

クラシック音楽を音楽大学で学ぶ学生の中には、海外音楽講習会に参加し、海外の一流の音楽家のレッスンを受け自分の演奏を磨き、現地で演奏会を聴き、そこに集まる他国の講習会参加者と音楽を介し交流したいという希望を持つ者がいる。本稿は国立音楽大学で海外音楽講習会に参加する学生を対象とする「外国語（英語）セミナー」（以下、英語セミナー）についての小論である。本学には、国内外の講習会で研修を希望する学生に対してその経費を援助する制度（国内外研修奨学金）がある。選抜試験を経て、奨学金を給付された学生に対して、英語、そして講習会が催される国の言語で、各90分のセミナーが行われる。そのため、英語セミナーでは、学生の現状に合わせて、講習会でよりよく学ぶことができるように、短時間で効率的にエッセンスを教える必要がある。本稿は、専攻の異なる二人の教師（第一著者：ピアノ専攻と第二著者：英語教育学専攻）によるコラボレーションによって執筆をした。第一著者と第二著者は、2016年に実施した演奏教師のためのFD（中西他編、2016）を契機に、日ごろから「教えること」や「学ぶこと」の意味や「具体的な教育事例」などについて、ともに考えたり話し合ったりしてきた。このため、第二著者が、本学の学生支援課より英語セミナー実施の依頼を受けた際に、海外音楽講習会事情に詳しい第一著者に協力を申し入れた。

本研究の目的は、1）クラシック音楽を学ぶ学生が、海外音楽講習会に参加するために求められる姿勢を明らかにすること、2）学生の現状とニーズを調査すること、3）調査に基づいて留学準備の英語セミナーを実践し、効果の調査をすること、上記の点に基づいて、次年度の英語セミナーの授業や教材を検討し、最適な案を作成することである。

2. 海外音楽講習会で求められる姿勢

海外音楽講習会は、音楽を学ぶ学生にとって、海外の著名な音楽家のレッスンを受け、様々な刺激を受けることができる貴重な学びの場である。参加する学生は期待に胸を膨らませ、レッスンに持っていく曲の練習に励む

だろう。しかし、音楽的な準備が整っていても、いざ講習会に参加するとなると、語学的な問題に直面する学生は少なくない。レッスンでは通訳が付く場合もあるが、講師の言葉を直接理解し、講師の質問に自分の言葉で答え、自分も躊躇することなく質問し、意見を述べられた方が学びの幅が広がるだろう。海外の講習会には様々な国から受講生が集まる。そのため、講習会開催国が英語圏でなくても、レッスンが英語に切り替わることがある。またレッスン以外の時間にも、受講生同士や講師との間で会話や討論が英語で行われることも多い。講習会では、このようなレッスン外の時間も非常に貴重な学びや経験となり、将来へと繋がる道が開けることもある。

また、欧米の講習会や学校では、語学能力のレベルに関わらず、より自発的な学習姿勢を求められることが多い。何かを教えてもらうのを受け身で待っているのではなく、自ら作品や演奏法の研究をし、自発的に考え、表現することがレッスンを受ける前提となっているだろう。自発的学習姿勢や能動的にレッスンを受ける姿勢の背景には、学校教育も影響していると考えられる。欧米では「自分で考える」ことを重視した教育が行われており、小さい頃から「考える力」を育成されている。そのため、音楽においても「自分で考え、自分の意志で表現する」ことが求められるだろう。第一著者は米国の中学校に通った経験があるが、様々な授業において自分で考え、表現しなければならないプレゼンテーションやディスカッションが多く行われていることに驚いた。また、留学先の大学院においても、ディスカッションやマスタークラスで自分の意見を述べたり発表する機会が多く、それが成績の一部として評価されることが多々あった。

本研究にあたり、日本と欧米の実技レッスンにおける学生の学習姿勢や態度の比較に関する適切な先行研究が見つからなかったため、海外で指導している日本人音楽家にインタビューをした(付録)。現在、米国フロリダ大学音楽学部ピアノ科主任の荒川ジャスミン茉莉子准教授は、学生がレッスンで指示を受ける際、「考えるプロセスが入るか入らないかが日本の学生との違いかもしれない」と述べている。そして「欧米の学生は日本人の学生に比べて圧倒的に先生に質問する量が多い。日本人学生が、先生の言う通りに見本に沿って演奏しようとするのに対し、海外の学生は、『なぜ』そのような解釈になるのかを理解しようとする傾向がある」と説明し、「『どうやって』演奏するのか、『何を』改善するのかを模索するのに加えて、『なぜ』そうなるのかを模索することが鍵になる」「レッスンにおいても『ここは強く』など表面的なことを指摘するのではなく、学生の本質的な成長を図るため『なぜこのように弾いたのですか?』といった質問をしている」と述べた。そうすると学生は、自分なりの考えと理由をしっかりと話すことができるとのことだ。

イギリスで演奏、指導をしているピアニストの根岸由起氏は、「日本人の学生は受け身の姿勢が多いように思う。これはレッスンにおいては良い点であるが、ある程度意見や質問があった方が教える側はハリがあって面白い。逆に海外の学生は、完璧に準備をしていなくても、色々なアイデアや疑問を持ちながらレッスンに臨み、途中段階であるが、どのように仕上がっていくかが楽しみである」と述べている。また、「語学はできた方が良いが、少なくとも積極的に意思を伝えようという姿勢はとても大事」「自分の意見を小さい時からしっかり持っている外国人は、ある意味強く、何でも怖がらずに言う人が多いので、それに圧倒されて萎縮しないことが大事」と説明した。

スイスのベルン州立音楽学校で教鞭をとる石塚シュタイナー佳代氏は、「先生からの一方通行な完全に受け身な姿勢だけではなく、音楽を通じた人と人とのコミュニケーションであることも基本的に忘れてはいけない」「もっと素直に個々の表現を言葉や態度で表現した方が、先生との音楽でのコミュニケーションも、生き生きと出来る」と述べている。また荒川准教授と同様、レッスンでは「あなたはこの部分をこう弾いたけど、あなたは本当にそう弾きたくて弾いたの? どうしてそう弾いたの?」など「学生側に質問をし、学生に考える時間を与えるのはとても効果的だ」と述べた。学生の答えも「漠然としたものではなく、和声や音楽理論を踏まえて答えさせるなど、時々立ち止まって学生に考えさせ、発言させると、海外でも自ら一緒に考える積極的な姿勢でレッスンを受ける準備が出来るかもしれない」と言及した。更に、「海外の地で勉強するには、固定観念を持たずにオー

ブンな姿勢で全てを純粹に吸収しようとする心構えが必要であり、海外で西洋のクラシック音楽を更に深く勉強するためには、まずはその地の文化に興味を持ち、共感するところからオープンになることが大事である。そのような心構えから、レッスンの中で先生が意図するもの、また音楽自体を別の角度から理解できるきっかけになる」と述べた。

海外留学における学びは、専門分野や語学の能力向上に限らない。足立は、「留学の成果」は「学問や語学の習得といったアカデミックな側面だけでなく、異文化体験や人間的成長といった側面まで含めて考える必要があり、そうしたすべての側面を含めて留学の教育的価値と捉えるのが適切である」（2010, p. 78）と述べている。また、前田（2017）は、セメスター留学から帰国した学生4名を対象に、個人別態度構造分析による学生の学びの検証をしたところ、異文化適応能力に関する項目が最多だったと報告している。海外音楽講習会のような短期の留学においては、異文化適応能力の向上までは至らないかもしれない。しかし、短期間であっても、その国の文化に触れ、異文化にオープンになり、積極的に他国の受講生や講師とコミュニケーションを取ろうとする姿勢が大切だろう。

3. 英語セミナーの授業計画

上述の3名の音楽家のインタビューに基づき、学生が講習会でよりよく学べるように英語セミナーをデザインした。学生の認識を調べるために、A. 事前アンケート（学生の現状とニーズ）、B. 英語セミナー準備課題、C. セミナー実施用 Questions and Answers、D. 事後アンケートを行った。

3-1. A. 英語セミナー事前アンケート

英語セミナー参加者に対して、事前アンケートを行い、学生の現状とニーズを調査した。

A. 英語セミナー事前アンケート			
滞在先の国	研修先の名称	出発予定日	帰国予定日
【英語力】			
1. あなたの英語力はどのくらいだと思いますか。（英検5級, 4級, 3級, 準2級, 2級, 準1級, わからない）			
2. 英語でコミュニケーションをするのはどのくらい得意ですか。			
4 : たいへん得意である ⇔ 1 : まったく得意ではない			
3. 英語でコミュニケーションをするのは好きですか。			
4 : たいへん好きである ⇔ 1 : まったく好きではない			
4. 英語でのコミュニケーションが上手になりたいと思っていますか。			
4 : 強くそう思う ⇔ 1 : まったくそう思わない			
5. 海外講習会に参加するにあたって、英語を自発的に勉強していますか。			
はい・いいえ			
6. 「はい」と答えた方は、具体的に学んでいることを記してください。			
【これまでの講習会や海外渡航歴】			
7. 今まで海外の講習会に参加したことはありますか。			
はい・いいえ			
7で「はい」と答えた場合：国や期間を教えてください。			
8. 今まで海外に行ったこと、または暮らしたことはありますか。			
9. 海外で暮らしたことがある場合、国や期間を教えてください。			
【今回の講習会の参加にあたって】			
10. 海外での講習会の参加にあたってのあなたの目標は何ですか。3つ書いてください。			
11. あなたが目標を達成するにあたって、不安がありますか。			
4 : とても不安がある ⇔ 1 : まったく不安ではない			

12. 不安があるとすれば何ですか。具体的に記してください。
13. 不安を解消するために、どんなことをしていますか。
14. 講習会に持っていく曲が決まっていたら教えてください。(作曲者と曲名)
15. 何故それらの曲を選びましたか。
16. それらの曲を練習する以外に、曲や作曲者、時代背景等の勉強や分析をしていますか。
4: とてもよくしている ⇔ 1: まったくしていない
17. 自分の演奏の特徴、よいところ、改善したいところは何ですか。
18. 自分の演奏の特徴、よいところ、改善したいところを練習、または選曲する際に考えていますか。
4: とてもよく考えている ⇔ 1: まったく考えていない
19. 曲や演奏について先生と話したいこと、先生に質問をしたいことは何ですか。
20. 海外での講習会の経験を、どのように活かしたいと思っていますか。
21. 海外での講習会参加後、長期の留学をしたいと思っていますか。
4: 強く思っている ⇔ 1: まったく思っていない
22. その理由は何ですか。

【海外講習会準備セミナー（英語）について】

23. 海外講習会準備セミナー（英語）で、あなたが学びたいと思っていることは何ですか。
旅行に必要な会話、レッスンでの先生との一般的な会話（あいさつ・質問の仕方・お礼の言い方など）、専門に関する会話、講習会参加者とのスモールトーク

3-2. 学生の「A. 英語セミナー事前アンケート」に対する記述

アンケートへの回答結果（5名）から主だったものをまとめる。学生の専攻楽器はピアノ2名、クラリネット2名、ホルン1名であった。滞在先はフランス2名、スイス1名、オーストリア2名だった。

英語力は英検準2級程度（60%）、準1級程度（20%）、不明（20%）であった。英語でコミュニケーションをすることについては80%が「たいへん好き」「好き」と答えた。英語でのコミュニケーションは全員が上手になりたいと思っていたが、海外講習会に参加するにあたって、英語を自発的に勉強している者は60%であり、残りの学生は勉強していなかった。海外の講習会は全員にとって初めての経験であった。学生が記した海外での講習会の参加にあたっての目標は「現地で音楽を学び吸収する、積極的に講師や参加者とコミュニケーションを取る、現地の言語に慣れる、海外で音楽を学ぶことによって新しい視点を見つける」とまとめられる。これらの目標を達成するにあたって、60%が「大変不安」「不安」と答えていた。不安の内容は、一般的な海外旅行の手続きや会話、講習会での会話に加え、自分の精神的な面であった。

自分の演奏の特徴のよい点には「明るい」「高音の明るい音色と低音域をはっきりと鳴らせること」などと記されていた。改善したい点は「息がまっすぐ入っていない」「スタミナ・高音域のコントロール・息の流れ」「テクニック面だけになってしまい表情が感じられなくなる」「曲に合った音色を見つける」などであった。全員が自分の演奏の特徴を考えて選曲しており、講師と話したいことや質問したいことは、具体的な練習法・演奏法として「自分の問題点を改善するための練習法」「楽に演奏しているように聞こえるようにする方法」「自然なフレーズ感を作る方法」などが挙げられた。精神面では「自信を持って演奏する方法」と記されていた。講習会の経験を「後期試験、コンクールなどに活かしたい」「長期留学を考えているため、現地に慣れたい」「将来指導者になった時に参考にしたい」と考えていた。英語セミナーで学びたいことは、旅行に必要な会話、専門に関する会話、レッスンでの講師との一般的な会話や参加者とのスモールトークなどであった。

3-3. 英語セミナー参加にあたっての準備課題

英語セミナーで会話練習をするにあたり、質問をGoogle Classroomに準備課題として載せた。準備課題は、本稿の「2. 海外音楽講習会で求められる姿勢」や3-2のアンケート結果から見てきた学生の現状とニーズ

を踏まえ、学生に自発的な学習姿勢を促し、音楽や演奏に関する会話を通して積極的に講師や他の受講生とコミュニケーションを取る練習ができる内容とした。

B. 英語セミナー準備課題

セミナー当日は、この内容に沿って授業を進めます。英語で解答してください。

For a conversation with the teacher at the masterclass 講習会での先生との会話のために

1. Introduce yourself to the teacher on the first day of the masterclass. 講習会当日にレッスンの先生に対する自己紹介をしてください。
 2. Please tell the name of the piece(s) you are going to play. あなたが演奏する曲名を伝えてください。
 3. How do you describe your performance style?
 - 1) What are the good points? 2) What do you want to improve?
あなたの演奏の特徴、よいところ、改善したいところを話してください。
 4. How did you choose the pieces to play considering your performance style? 自分の演奏の特徴をどのように考えて選曲をしたかを話してください。★曲数が多い場合は、曲をしぼって、準備してください。
 5. Please talk about the pieces you are going to play: characteristics, form, style, historical background, etc., anything that you know.
自分の演奏する曲について知っていることを話してください。(曲の特徴、形式、スタイル、歴史的背景、他)
 - 1) How do you want to play these pieces? これらの曲をどのように演奏したいと思っていますか?
 - 2) What do you find difficult? 何が難しいですか?
 - 3) What do you want to learn from the teacher? 自分が先生に習いたいと思っていることを話してください。
- ～ At the end of the lesson / After the lesson ～ レッソンの終わり / レッスン後に
6. Please thank and tell the teacher what you learned at the lesson.
先生にお礼を言い、学んだことを話してください。
 7. How do you confirm the assignments for the next lesson with the teacher?
次のレッスンの課題を確認する時の質問をしてください。

3-4. アンケートと準備課題から見えてきたこと

アンケートで講習会参加の目標として、講師や他の参加者とのコミュニケーションを取ることや、現地の言語に慣れることなども挙げられたことから、音楽的な学び以外も積極的に吸収しようとしている姿勢がうかがえた。また、セミナー受講生は自分の演奏の特徴を分析できており、講習会で自分が学ぶべきことを把握していた。選曲においては、自分の演奏の特徴や改善点を考慮し、すでに演奏した曲、あるいは今後演奏する予定のある曲も含め、選択していた。自分の演奏や曲の分析は、自発的に学習する上で欠かせない作業である。またセミナー受講生全員が、英語のコミュニケーションが上手になりたいと思っており、旅行に必要な一般的な会話だけでなく、専門に関する会話を学びたいと考える学生が80%いたことから、レッスン内でも英語を積極的に使いたいと思う学生が多いことが分かった。

準備課題は提出を必須としていなかったが、セミナー実施前に Google Classroom で回答を提出した学生が数名いた。提出された学生の回答から、英語での曲名や楽章の書き方、また演奏に関する英語表現に苦労した様子が伝わってきた。今までこのような内容の英語を学習する機会は少なかったと推測し、本セミナーでは、音楽や演奏に関する英語表現に焦点を当てる意義があると感じた。

アンケートや準備課題の回答を基に、講習会で実際に聞かれるかもしれない質問や答え方のテンプレートと選択肢をまとめた課題 Questions and Answers を作成した。答えの選択肢には学生がアンケートや準備課題で記述した内容、そしてレッスンでよく使われるフレーズや言葉を載せた。また、講習会で必要となるかもしれない伴奏者との会話、一般的な海外旅行の手続きや会話、そしてその他のレッスンでよく使われる単語や表現のリストも付けた。

4. 英語セミナーの実施

7月5日(火)18時から19時30分、学生生活委員のジャズの池田篤教授と本稿の二人の著者でセミナーを行った。参加者は5名であった。セミナーの概要を以下に示す。

(1) 海外講習会参加、または留学時に必要なこと3点について話した。

①積極的に人と繋がる：海外の講習会から得るものは、レッスンでの学びだけではなく、講師、そして他国からの受講生との出会いもある。講習会で出会った講師や受講生から様々なことを学ぶことができ、その貴重な出会いは将来へと繋がることも多い。ただ単にレッスンを受けに行くのではなく、是非積極的に講師や他の受講生達と話し、縁を築き、自分の世界を広げる機会を大切にしてほしい。初めて会った時には、ただ単に挨拶するのではなく、“I’m so excited to study with you”, “I’m so happy to meet you” など、積極的にコミュニケーションを取り、出会った人と積極的に繋がる姿勢をもつように助言した。

②音楽を深く学ぶ：演奏する曲について研究し、楽譜を深く読み、自分の考えや意思を持って演奏することが大事であり、その考えや意思を言葉で説明できることも大切である。海外講習会では、レッスン、またはレッスン以外の時間に講師や他の受講生達と話し合うことで、自分の音楽が更に深まっていくかもしれない。数日間、または数週間、講師や他の受講生達と同じ場所で生活をし、音楽や演奏についてなど、様々なことを話し合えるのも講習会に参加する醍醐味である。そういった貴重な機会に積極的に参加することで、より深く音楽を学ぶことができるだろう。

③音楽を学ぶ姿勢：池田教授は、「ニューヨークで指導を受ける際、漠然と『教えてください』』というような受け身の態度で行くと何も教えてもらえないが、『あなたからこれを学びたい』という積極的な姿勢で行くと、どんどん教えてくれる。ただ待っているのではなく、自分から積極的に行くことが大切である」と説明し、「ただ黙っているだけでは、何も考えていないと思われてしまう。何が学びたいか、何が自分の問題点か分からなければ、『自分に何が必要ですか?』』というような質問であっても尋ねる姿勢が重要」と話された。

(2) C. セミナー実施用 Questions and Answers

C. セミナー実施用 Questions and Answers 課題を配布し、内容や使い方の説明をした。表に書かれた質問に対して選択肢の中から選び、答えられるように、答え方の例を示した。また補足として、英語での楽章の言い方や、曲名を伝える際の注意点などについて説明した。

(3) ワークショップ

3名の教師が、学生を3グループに分けてワークショップを行い、Questions and Answers 課題に沿って、講習会を想定した会話の練習をした。課題が終わるとグループを交替し、繰り返し同じ会話の練習を行った。アンケートで曲や作曲家、時代背景等の勉強や分析を「あまりしていない」と答えた学生もいたが、セミナー当日には、全員が作品についての知識や自分の考えを言えるように準備してあった。しかしながら、英語で会話することに慣れていない者とそうでない者の差は大きく、英語で説明することに苦戦する学生が多く見られた。

(4) まとめ

ワークショップの会話練習では、参加者全員から音楽に対する高い志や情熱がよく伝わってきた。語学が心配であっても熱意は伝わるので、失敗を恐れずに積極的にコミュニケーションを取り、貴重な経験を楽しんで沢山のことを吸収してほしいと強調した。

5. D. 事後アンケート

英語セミナー実施後に、D. 事後アンケートを行った。

D. 事後アンケート

1. 英語セミナーの内容は、海外講習会を受けるにあたって、役に立つと思ったところがありましたか。
2. 1で答えた理由は何ですか。具体的に教えてください。
3. セミナーでは①「積極的に人と繋がる」、②「自発的に音楽を深く学ぶ」ことについて強調して、説明とワークショップを行いました。この2つについて、記憶に残っていること、印象に残っていることはありますか。
4. 3で「はい」と答えた方は、どんなことであるか、具体的に記してください。
5. 海外で積極的に人（先生や他の受講生）と繋がるために、あなた自身はどんなことをしてみようと思えますか。
6. 講習会で深く音楽を学ぶために、あなた自身はどんなことをしようと思えますか。
7. 英語セミナーで、もっと学びたかったということがあれば、記してください。
8. 他に感想やご意見、質問等があれば、記してください。

5-1. D. 事後アンケートに対する記述

D. 事後アンケートには4名の学生が回答した。英語セミナーの内容が、海外講習会を受けるにあたって役立つと思ったところがあるかという質問に対して、全員が非常にそう思うと回答した。その理由として「実際に言葉が発することで自分のためになった」「講習会でのレッスンで活用できる言葉や積極的にコミュニケーションを取る方法などを学ぶことができた」「覚えた英語をアウトプットする機会が作れ、なおそれを添削していただける良い機会だった」「英語は世界共通」といった意見があった。「積極的に人と繋がる、自発的に音楽を深く学ぶ」という点について、「レッスン以外でも積極的にコミュニケーションを取り、話題を広げていくことで先生の印象に残り、自分の将来に繋げていくこともできるということを学んだ」と記述する学生がいた。海外で積極的に先生や他の受講生と繋がるためには、「前もって言う言葉を考えておく」「レッスンで学んだことを先生に伝えてみる」「完璧な文でなくても、とりあえず相手に話しかけてみる」「できる限り言葉を繋ぎ、何かを伝えようとしている姿勢を示したい」といった回答があった。講習会で深く音楽を学ぶために「レッスンを受けるだけでなく、他の受講者のレッスンを聴講したり、講習会が企画するコンサートなどに足を運ぶ」「最低限、話すことはできなくても先生の話される言葉を理解することは必要なため、必死に話を聞いて理解に努めたい」「下調べをしておく」「今からでも少しずつ言語力をつける」といった記述があった。「英語セミナーでもっと学びたかったということがあれば、記してください」という問いに対して記述した学生はいなかった。

5-2. アンケートから見えたこと

英語セミナー実施後アンケートから、セミナーが回答者全員にとって有意義であったことが分かった。特に、講習会のレッスンで活用できる言葉を学び、実際に言葉が発し、アウトプットする会話練習が役に立ったようである。また学生が英語力の必要性、そして積極的にコミュニケーションを取ることの重要性を自覚し、実践しようとする意識を持ったことが見えてきた。「今からでも少しずつ言語力をつける」という記述から、セミナー実施後から海外講習会までの間も、専攻実技だけでなく、語学の向上を目指し学習しようとする姿勢がうかがえた。

6. 考察：英語セミナーの検討

セミナーでは、受講生全員の音楽に対する熱意や意識の高さを感じられた。英語に関しても、受講生は英語力の必要性を認識し、真剣に取り組んでいた。しかし、ほとんどの学生が、音楽や演奏に関する英語での会話に慣れていないことが明らかになった。90分という短時間で講習会に参加するために必要な英語を全て教えることは不可能である。密度の濃い時間で効率的に指導する必要がある、そのためのアンケートや準備課題は役立つと考える。英語セミナー実施後のアンケートで、セミナー受講生は英語セミナーが役立つと回答していたが、実際に不自由なく会話ができるようになるには、1回の練習だけではなく、繰り返しアウトプットの練習をする必

要がある。アンケートで「今からでも少しずつ言語力をつける」と記述した学生もいたように、セミナー参加後に受講生がセミナーで学んだことを復習し、練習できる自習用ビデオ教材を作ることができれば、自分の考えや音楽について英語で話すことに、より慣れることができるのではないだろうか。

6-1. 英語セミナー自習用教材作成検討

英語セミナー受講生がセミナーで学んだ内容を復習し、アウトプットの練習ができるように、講習会での会話を想定したシミュレーションビデオを作成する。ビデオには2人の人物が登場し、会話をする。講習会でであり得る様々なシチュエーションを選択できるようなコンテンツとする(表1)。

表1 シミュレーションビデオコンテンツ(案)

シチュエーション	登場人物	会話内容
レッスン室での会話	講師, 受講生	・自己紹介 ・曲や演奏について
レッスン室以外での講師との会話	講師, 受講生	・レッスンについて(学んだこと, 今後の課題など) ・講師への質問(演奏に関する疑問, 留学を含め将来的な展望についてなど)
他の受講生との会話	他の受講生, 受講生	・自己紹介 ・親交を深める会話(専攻の楽器, お互いの国について, 再共演の可能性など)
講習会での事務的な会話	講習会事務所, 受講生	・レッスンや練習室に関する質問や要望 ・講習会中の生活面での質問 ・受講生コンサートについてなど
海外旅行における会話	空港や街中の人, 受講生	・空港での手続きの会話 ・空港から, または街中での道順を尋ねる会話

まず始めに、各シチュエーションに合った登場人物2人の間で行われる会話に、英語字幕を付けたビデオを作成する。受講生は練習したいシチュエーションを選択し、視聴できるようにする。次に、アウトプットの練習ができるように、同じ会話内容で、講師や他の受講生などの相手役がスクリーンに向かって話しかけるビデオを作成する。受講生が答えられるように、相手役は一定の時間をおいて話し、受講生の答えのヒントになるような字幕を付ける。受講生はそれを見ながら、実際に会話を行っているように練習ができる。そして同じビデオ内容で字幕がないものでも練習できるようにする。答え方が分からない時は、最初の会話のビデオを再度見ることによって確認することが可能である。コンテンツの内容としては、セミナーで練習したことや Questions and Answers 課題に載せたことがほとんどであるが、このような実際の会話を想定したシミュレーション練習をセミナー参加後に受講生が繰り返し行うことで、よりスムーズに話すことができるようになると思われる。セミナー実施後のアンケートで、添削してもらえることが役立つといった記述があったことから、録画機能も付け、セミナー講師に提出することも可能にしたい。

6-2. 海外講習会参加を希望する学生のための To-do リスト

今後、奨学金受給者に限らず、学生が海外の講習会に参加しやすくなるように、講習会に参加するために必要な準備の To-do リストを作成することも考えられる(図1)。

図1 海外講習会参加を希望する学生のための To-do リスト (案)

事前準備

- 講習会のホームページやパンフレットを読み、講師や国、講習会の特徴や規模を比較し、選択する
- ・レッスンを受けたい講師はどの講習会にいるか？
 - ・行きたい国はどこか？
 - ・大規模な講習会に参加したいか、小規模なアットホームな講習会に参加したいか？



講習会申し込み



参加準備

- ・曲の選択、練習、研究
- ・語学の勉強、練習
- ・国の情報や空港での手続き方法、空港からの道順などの調査
- ・講習会での宿泊施設や講習会環境の調査
- ・パスポート取得、航空券の手配など

To-do リストには、講習会事務所への英語での問い合わせや申し込み、現地での質問の仕方などの例文も併記する。近年では、海外講習会に参加するための情報提供や申し込みなど全てを依頼できる会社もあり、上記の項目を自分で行わなくても参加することは可能である。しかし自分で情報収集をし、直接講習会事務所と連絡を取り、申し込むことは、今後留学を目指す、あるいは世界で活躍する音楽家を志す学生にとって、自信に繋がる勇気ある第一歩となるだろう。

7. 最後に

国際的な視野を持った音楽家になるためには、世界の共通言語である英語の能力は必須だろう。これまで英文法や一般的な英会話を学ぶ機会があっても、音楽専攻の学生として実践的に使える英語を学べる機会は少ない。また海外のコンクールや講習会の英語での申し込み方、問い合わせの書き方を勉強できる教材は少ない。そのため、音楽家として必要な実践的英語が学べる教材や授業の研究が必要だと考える。更に、英語力向上に留まらず、海外のレッスンを受けるにあたって求められる自発的な学習姿勢や、考える力を育成できるような授業内容の工夫が必要である。今回、英語セミナー実施にあたり、受講生にセミナー参加前のアンケートや準備課題を出したのは、現状調査および効率的にセミナーを行うためのものであったが、それだけではなく、学生に自分の演奏や作品について考えさせることによって、自発的な学習姿勢を促すことも狙いの一つであった。海外でクラシック音楽を学ぶ、あるいは演奏していくためには、他国の文化を知ろうとし、多様な人々と交流し、コミュニケーションを取ろうとする姿勢が大事である。国際的な視野を持った音楽家を育成できるよう、セミナーや教材を通して学生が英語能力、自発的な学習姿勢、そして積極的にコミュニケーションを取ろうとする姿勢を身に付けられるような、更なる研究や試みをしていきたい。本稿は8月冒頭に記している。このため、学生が実際に講習会で、英語セミナーで学んだことがどの程度役立ったのか、困ったことは何であったのかなどまでカバーができなかった。講習会参加後のアンケートは、次年度の英語セミナーの授業を考案するために使いたい。

本研究は、国立音楽大学研究倫理委員会の承認を得て行った。

謝辞

本研究にあたり、ご協力頂きました荒川ジャスミン茉莉子准教授、石塚シュタイナー佳代氏、根岸由起氏に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 足立恭則 (2010).「大学学部課程における海外留学の教育的価値とカリキュラムにおける位置づけ」, 東洋英和女学院大学『人文・社会科学論集』, 第28号, pp. 77-91.
- 中西千春他 (編著). (2016).『音楽大学のグループレッスンにおける思考力育成の取り組み』, 飛鳥井出版.
- 前田ひとみ (2017).「個人別態度構造分析による日本人学生の海外留学における学び」, 『目白大学高等教育研究』, 第23号, pp. 1-10.

付録

海外で演奏、指導をしている音楽家への質問と回答

- 1) 日本人と海外の学生のレッスンの受け方や学習姿勢の違いがありますか。それは何ですか。
- 2) 日本人学生が海外で演奏を学ぶために必要なことは何だと思えますか。どんな準備が必要だと思えますか。
- 3) そのために指導者はどんな工夫ができると思えますか。

荒川ジャスミン茉莉子准教授 (米国フロリダ大学音楽学部ピアノ科主任)

- 1) 私の経験上、欧米の学生は日本人の学生に比べて圧倒的に先生に質問する量が多い。日本人学生が、先生の言う通りに見本に沿って演奏しようとするのに対し、海外の学生は、「なぜ」そのような解釈になるのかを理解しようとする傾向がある。日本では質問をすること自体が欧米に比べて「失礼」だったり「無知だと思われて恥ずかしい」という観念が強いのも関係しているのかもしれない。レッスンで先生から指摘を受けた時に、考えるプロセスが入るか入らないかが日本の学生との違いかもしれない。アジア人は先生に何も言い返せない文化で育っているかもしれないが、何も話さないのが問題なのではなく、何も考えていないのが問題である。レッスンにおいて「ここは強く」など表面的なことを指摘するのではなく、学生の本質的な成長を図るため「なぜこのように弾いたのですか？」といった質問をしている。そうすると学生は、自分なりの考えと理由をしっかりと話すことができる。
- 2) 「どうやって」演奏するのか、「何を」改善するのかを模索するのに加えて、「なぜ」そうなるのかを模索することが鍵になると思う。なぜなのかを知りたいければ、自分で情報を集めたり、先生に質問することは必須になる。疑問に思うことを否定せずに追求することがとても重要だと思う。
- 3) 先生として、学生が好奇心を持ち、疑問を持てる環境を提供することが重要である。「指導」というより、一緒に「探求」できる空間を持つことである。学生が自身の理解力を高め、学んだことをツールとして、他の側面に応用できるようにナビゲートしていくのが先生の大きな役目だと思う。

石塚シュタイナー佳代氏 (スイス・ベルン州立音楽学校講師)

- 1) 勉強熱心で、勉強に対しての興味と好奇心がある学生は、日本人でも海外の学生でも学習姿勢については同じだと思う。ただ日本は上下関係がある社会なので、若い日本人の学生が海外の偉い先生のレッスンを受けるとなると、「あなたのレッスンを受けることが出来てとても光栄です」という一歩下がって相手を敬う日本語的表現が、態度や姿勢にも出ている学生をよく見る。これは批判をしているわけではなく、先生に敬意を示すということでは、先生にとっても非常にコミュニケーションのしやすいレッスンになると思うが、先生からの一方通行な完全に受け身な姿勢だけではなく、音楽を通した人と人とのコミュニケーションであることも基本的に忘れてはいけない。例えば海外の表現では、若い学生でも偉い先生へ「あなたのレッスンを受けることが出来てとても嬉しいです」や「とても楽しみにしていました」という表現をする。これを日本語翻訳ではシ

チューエーションによっては「光栄です」と日本人的表現に変換されることは多いような気がする。しかしこれは根本的に、海外の若い学生は、本当に本人がこの偉い先生のレッスンを受けられることに喜びを感じているので、「嬉しいです」と表現をして、その嬉しさはレッスン中での相槌の仕方や、先生がおっしゃったことによって学生本人が曲の中で新しい音楽的な発見をした時の目の輝きなどで生き生きと表れる。若い学生が強い好奇心を持って、そして先生が意図していることを自分なりに理解をしようとしている姿勢を見た時に、先生側にとっても大変楽しいレッスンになると思う。日本人学生も日本人的な敬うという丁寧な良い姿勢は忘れずに、しかしもっと素直に個々の表現を言葉や態度で表現した方が、先生との音楽でのコミュニケーションも、生き生きと出来ると思う。

2) 海外で演奏を学ぶためには、まずは日本文化の当たり前とされていることを日常的に当たり前と思わないこと。そして日本と比べないこと。ヨーロッパは不便だという感覚で生活をしていたら、クラシック音楽を海外で勉強する意味はないとまで私は思っている。海外の地で勉強するには、固定観念を持たずにオープンな姿勢で全てを純粹に吸収しようとする心構えが必要。そのためには、日本人同士で固まらずにその地での海外の学生ともたくさん交流を持つこと。日本で、日本語で教育を受けてきた私達が、海外で西洋のクラシック音楽を更に深く勉強するためには、まずはその地の文化に興味を持ち、共感するところからオープンになることが大事だと私は思っている。そのような心構えから、レッスンの中で先生が意図するもの、また音楽自体を別の角度から理解できるきっかけになると思う。

3) レッスン中に音楽的な指導や提案をする時に、学生側に質問をし、学生に考える時間を与えるのはとても効果的だと思う。例えば「あなたはこの部分をこう弾いたけど、あなたは本当にそう弾きたくて弾いたの？ どうしてそう弾いたの？」や「この部分はこうであるべきだと思うんだけど、それは何故だか分かるかしら？」など。学生側からの答えも「こっちの方が綺麗だから」などという漠然としたものではなくて、和声や音楽理論を踏まえて答えさせるなど、時々立ち止まって、学生が考えて具体的に発言させる方法を時々レッスンに取り入れると、レッスン中にも学生本人がオープンでいなければならない姿勢が身につについて、海外でも自ら一緒に考える積極的な姿勢でレッスンを受ける準備が出来るかもしれない。

根岸由起氏（イギリス在住ピアニスト、指導者）

1) 一般的に日本人の学生は大人しく真面目で、レッスンにきっちり準備をしてくるケースが多い。しっかりよく弾き、暗譜もきっちりして優秀だが、レッスンでは、物事を良くする・違う観点から見るという点では、きっちり準備し過ぎると先生が教えるににくいという声をよく聞く。きっちり準備をしても柔軟に色々なことを試すことができれば問題はない。また、日本人の学生は受け身の姿勢が多いように思う。これはレッスンにおいては良い点であるが、ある程度意見や質問があった方が教える側はハリがあって面白い。逆に海外の学生は、完璧に準備をしていなくても、色々なアイデアや疑問を持ちながらレッスンに臨み、途中段階であるが、どのように仕上がっていくかが楽しみである。

2) 語学は少しできた方が楽だと思う。少なくとも積極的に意思を伝えようという姿勢はとても大事。自分の意見を小さい時からしっかり持っている外国人は、ある意味「強く」、何でも怖がらずに言う人が多いので、それに圧倒されて萎縮しないことが大事。準備としては、色々行き先の国や文化について調べておくこと、可能であれば、誰か関係者にコンタクトを取るなど。語学の重要性は過言ではない。意思疎通ができないと損をすることが多い。

3) はっきりと上記の点を学生に伝える必要がある。色々な性格や能力の学生を対象に、指導者は広い視野を持って、何が足りないか、何を補ったらよいかなど指導できたら良いと思う。時には指導者のコネクションも活用したり、経験談をしたり、学生の先輩に話に来てもらえるように手配などをするとよい。